抱[illegible]悪心

イ13
976
1

1.13
976
1-5

若鮎の秋浅尋て登る也霧とともに山下水の
源をもとめて波路遠く霧に出るとも是ぞ志る竜
栈え(?)はしとはいふ思ふ事ま、いかにもさらにいふされしもは
河より猶大なるは河海の深ふ底までを探るも波大殿の
龍馬の勝ちる精をもえられば鯖とあふ浅江の
流をわけ字一露の志て雅美水の如く瑾理もと
比をしれとなくるしあるてこの世より今の所まで
あらの浪人にも参へ細谷川の絶す後望へはしまひ延

龍名なりぬへくしれとさへ源氏を深く伝へとなる
勢也ほとは此物語陽に男女の情をあらはし陰に
人倫の道を示し其外勧善懲悪の筆法典
止観玄義の深き旨をも書しともいふ蘇經馬史にも
ふかき趣と法とし列荘の寓言に同しくかれも中々えん
なる女の筆まて出るといふに読人かなわぬ物かたりかとる
の深く遠くしてなかなかわかくらへよと見えるまたの人
栖事待授ハ出来し給ひし道を世に再昌院法印北湖の

月の光をかりてかく初学の助なとしてをこへ世に
ひろく拡ひ学とは我か道と知れともさへ文匠多く拡て要をとりて
あへ説あかさまに迷ひと我やなしいま無州といへる
詞の義とともに人事の跡とも侍れは求めて次の巻
の大意哉再返さ云葉もくみ見む人の心に任し
尚あらしむとなをもおもひしぬきて物語もむ紫の中付
此文よみわかのむね山口の花も更にあらへやあらむ
つきぬてん拝まみかきくよろつ世にものこさむとて也

みくしまきとしらぬ人ハ雨月の道ハ今ハ桜人と
なき藍むけ住の身なく擣擽のたゝかふ光らぬ道は
須磨之しらかゝる哉いさよ蛇道と此文の源氏のゝ
よりの道なむ初学の人ハ桐壺の夕の露光隈なく
夢の浮橋善縁となきは海士人あしきぬくこそ人はまか
夏草野分も末の葉と小蔵の角の浅みしか
篝火や年の名を縁として紅葉の賀の水無月思ふさ
虫かく小宮の下かけ成むめ直きて人

篠本信宗述書

源語忍草巻之一

目録

桐壺　帚木
空蝉　夕顔
若紫　末摘花
紅葉賀　花乃宴
葵　榊
花散里　須磨
明石

きりつぼ

いづれの御時にか。女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に。やむごとなききはにはあらねど。すぐれてときめき給ふを巻の名に書しは桐壺の更衣なり。此人は大納言のむすめなり。父大納言はとくうせ給ひけり。此更衣のはらにすぐれたる御子おはしましけるが帝にまゐらせなば。さいはひもありなん。さなくば此家を給はんとなくなりても。いかにもして宮仕へさせよと父大納言遺言ありしが母君よしあるゆゑ御家がらの面にも出し給ふ。みかどかぎりなくおぼし

13
976
1

並びなく御寵愛なのめならねば、さるによりて弘徽殿の女御をはじめ、何れの女御、更衣もそねみ給ひて心ぐるしき事ども数有ければ、此弘徽殿といふは右大臣の御むすめなり。人よりさきにまゐりたまひて、殊に世おもき方なるに一の宮出来させ給へり。後に朱雀院と申也。此弘徽殿は帝も重うせさせ給へど、猶して更衣は心くるしう明くれそのことを思ひて、そのほどの病者になりなどして、いとど衰へ思ひし此御なかに、玉の御おのこみこ生れ給ふと書しは源氏なり。此君三つになり給ふ夏、御母更衣の日ごろの病者おもくなり限りの様にみえ給へば、暇申て里へ出んとし

給ふ。みかど名残おしませ給ひて、さながらくとおぼすをもゆるさせけるに又更衣

かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

とよみ給ふ。輦車の宣旨を下さる。此車は手にてひく座敷の内をゆる也。勅諚有りてゆるさるる事のありがたきをゆるさせ給ふ。源氏をば内裏に留めて、更衣ばかり里出給ふ。いくほどなくて更衣終に夜半過る程に亡なり給ふと御使ひ帰り来て奏す。聞召す御心地何事も思しわかず、御涙にくれさせ給ふ。源氏も内裏を出させ給ひて、更衣の母君に預け給ふ。奥里

号にかくいふ三位のくらゐを給はりたるに帝御なげきを
はらしかねてあはれ〳〵と思召けり風あらく吹
咲夕暮に靱負の命婦といふ女を更衣の母君のかたへ
御使にたてらるゝ御製

宮城野の露吹むすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

命婦母君といろ〳〵物語ありて源氏の御様体よく見えて帰
るに更衣の手ならひあり櫛箱などかたみにとて母君命
婦にわたされけりみかどは長恨歌の絵双紙を御覧じて貴妃の
別れを悲しみ給ひし玄宗のかなしみにひきくらべいとゞ御涙
なれかゝる折ふしも命婦母君の御返し奏しけり御覧じすまし

あらき風ふせぎしかげのかれしより小萩がうへぞしづ心なき

命婦もかく君に奏しけり其夜ハ御ねふらせ給はず人々ハ
方士がやうなる人あらまし尋ね行かまし給ひしか
かんざしなりともかたみにしかんと思召させ給ひてみかど

尋ゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそこと知るべく

とりすがり給へども御いとまありて源氏内裏へ帰り給ふ
年月重なるまゝに此世の人とも見えず美しく生ひ立
給ふ七つより御ふみはじめさせ給ふに何事にても
さとくなりて琴笛の音にも雲井を響かし給へば
其比唐土より相人参りけるすなはち源氏の相をみを

させ給へども。唯人にておほやけの御後見をさせたまふべく。
天下をのぞみ給はんと奏しけれバ。さやうにおぼさんと申すと。
相人源氏の御かたちを見て。光る君と号しけり。年月
経れど更衣の事わすれさせ給はで。似たる人もやと
尋ねさせ給ふ。先帝の四の宮似させ給ふと内侍の典侍
といふ女房奏しけれバ。御兄の兵部卿の宮におはして。
入内をさせ給ひて。藤壺の女御といふ。あやしきまで
更衣に似させ給へども。御心を慰むやうにおぼす。此女御を
稚きよりの源氏御心にかけ給へり。源氏十二にて御元服
あり。源氏の姓を給はりて只人に成なし中将になさせ

給ふ。御元服の時。御添ぶし。親王。左大臣をたのむ。左大臣の
北の方は。帝の御妹なり。此御はらに蔵人の少将と
いふ男子ひとり。姫君ひとりあり。姫君を源氏の北の方
みかどよりも御定ありて。元服の夜左大臣の御許へ源氏
わたらせ給へり。此姫君を葵の上といふ。源とは従弟の
歳十六なれば源に四つの御姉也。源氏の母君の御里は
二条の院といふ。内裏にては桐壺におはします。此巻に源氏
誕生より十二歳までの事みえたり

はゝき木

五月雨の晴間なき比。内の御物忌に籠りて源中将

爰にてさみだれの比に、源氏の御とのゐどころへ左大臣の公達頭の
中将まゐり給ふ。桐壺巻に蔵人の少将といひし人なり。葵の
上の御兄なり。右大臣の御聟にて弘徽殿の妹聟なり。
源氏の御ためには従弟又小舅なり。殊の外間よくて、何
事もかくさずいひかはし給ふ。四書七書見なれ給ふなどて、
て、好色の文どもを取出て、たがひにこれかれと給ふ所へ、左の
馬の頭藤式部の丞まゐりて、女の品定を上中下に
まうけて、工の作る器物、絵師のかける絵などになぞらへて
御あらそひ定しを雨夜の品さだめといふ。扨また
語さて馬の頭のかたりし女の事どもを語る。若き時家と

思ふ女侍りき。かたちなどはよくもあらず侍りしかど、若かりしに
よろづ上手にて、何事に付ても我にまめやかなりしか
見る目かはらむと、本妻とさだめこなすゆゑ、嫉妬ふかくて、ゆるし
なく、常に疑ひ侍りしを、うるさく思ひて、かくては長くはそひ
とげん事かたかるべし。此女のいやがる思ひたゆるほどの家と
なもかんなどいひかはせしに、いとゞむつかしく成て、馬の頭が
手を引よせ、指をくひ付けるが、なかく今はかゝる疵さへ付ぬ。
けふこそ限りの別れとおどしてむかへのかへ

手をおりて逢みしことをかぞふればこれひとつやは君がうきふし

とかく詠じ、ちぎりきよせんと思ひて久しく音信ざりし

ほどにいたく思ひ詫(わび)て、ぞの、わくなりぬ。かくて後に通(かよ)ひ
し女は、口(くち)もよく、歌よみ、琴ひきやさしき方は得たれど、
心ゆるさんかたぞえとぞみえん。ある夜まうでたりけるに、
ある夜上人、此女の家へまうでけり。笛を吹ければ内より女和(わ)
琴(ごん)を弾あはせて、歌などよみかはす。情まさるをとおもひ、
うちとけてあまた夜の絶(たえ)侍りしとかたるに、此つぎに頭の中将
かよひ給ふもののひそく見初し人ありし。親も許く、心かよはせ
みて、ほどなく中将をむかへる心ぞえ、されど、あやうかなりし。
えしらぬほどいかばかりものとも、そのさまも得侍りき事。
かぞしこの花と見て、かくいひ相とせり

山城(やましろ)の垣(かき)穂あるとも知らぬに、家(いは)を離(あかれ)て、かくよなてこの露
を後中将おもしけれど、いと痛く思ひかけずなりて、とかくしらく
娘(うち)なる事を得しざりし、ほどに心やすくて絶(たく)し
ねど、跡(あと)もなくうせて、今に有所をえ知らず。娘不便(ふびん)
わりなくて、忍ぶと思ひとかけるを絶ゆ。此女を夕顔といふと
いへり。清き娘を玉のごとしといふ。此頃式部の丞がかたる博士(はかせ)の
かしこき物習ひに参りけるに、あるじ娘あまた侍りし
かば、兎角(とかく)いひよりてかよひけるに、よく心のきたる女にて、
人を師として詩などを習(て)ひ得たる、わが身の男は恥(はぢ)し
き女にて侍りしに、或時(ある)まゐりけり侍るに、蒜(ひる)を服(ぶく)して、けと

イ蒜

えさし。世ならひ生むかれども。云ふかひなく。又ふを逢し哀なる
中にも中将と申しけるは。いづれ紀女にて皆笑ひなどし。源の
時も源ひそく。又露を晴ぬ事の御車の右大臣へわたり
給ふ葵の上の御かたへ也。今宵節分なれば内裏よりは。
塞がりの御方なれば。方角あしく御方違へあるべしと人々申。
蔵識に限らず。上臈も四季に御方たがへあるなり。二条院も
おなじ筋なれば。いづくにかと思しめぐらすに
伊予の介といふ御家人の子。紀伊守なりける人の家。中川に
何某。様なれ。おもしろきとて紀伊守を召し給ひけれ。畏まりて
紀伊守が伊豫の介が家に慎む事ありて妻子どもも私方へ

引越し狭く侍れどもいかにとてかく給ふを申上。只一夜なれ
事なれば。くるしからじとて。おのづからぬ紀伊守を御使しられて
なりしゆ風涼しう蛍飛ちがひて。いと面白し。源の
おもしろきと座敷に近き西の方に人のけはひしたるを。いかなり
若きゆる所ありやと。紀伊守人などみえしに。いふことを申しが
源の事也。実なる御ようにて。給へど。何る事ども清し
およびあるきの人なれ。式部卿の姫君を朝顔に付て
歌など送りし給ひしなど申しける。何なる御菓子出されなば立
退きて申ぬ御まで思ひ出て赤酒を進めなどする
御給仕に十二三ばかりの子ども。あまた出されければ。おほくの

いはゞまゝぞと思ふ様なれども。まゝ子ハ私がおとゝと。かまゝハ右衛門の督
のすゑの子と申。此伊予介が女房ハ右衛門の督にて中納言
かけたる人の娘なり。宮仕をも出さんと思ひしかど二親とも
むなしくなりしのちハ見ぐるしげなるおやこもなくて。かく思ひの
外なる伊予介にはうられて居るなり。婦など便少き男も
伊予介がかたにあるなり。伊予介が後連の女なれバにて
紀伊守が為にハ継母なり。此女を空蝉といふ。夜更ぬれバ
姉し給へども。あるじの御まへより寝られ給ふゆへ。そつと
起出て兎角して相かけりよせし所へ忍び入て空蝉をつまへて
おさへしも。顔しかめへひきよせども。との遠なくて明方近う

なる迄ハ語らひ給ひぬ。夫よりまたこそ〳〵とかよひ給ひしかど
空蝉が弟の童を呼寄せ御傍へ召使ひ給ひしかども。かくのかひ
ふくめて又逢迄をと頼み給へども。かようにし給ふとも紀伊守
の家の中水の流れもよろしとかきつけて此後も又
給へども。やりかたのやり水の面目と悦ぶ。二夜も空蝉に不逢ど
かへつて逢ぬまでの恨をいひて。かくの如くかひつくの守
はゝきゞの心をしらでそのはらの道にあやなくまどひぬるかな
とかきしかばせらるゝ
数ならぬふせやに生る名のうさにあるにもあらで消るはゝきゞ
とよみしけり

空蝉(うつせみ)

寐(ね)られ給はぬまゝにと書出しけるは、はゝき木の歌を
よみかはし夜の事なれば、空(むな)しく帰り給ひて涙に袖(そで)を
濡らし給ふにつけ、此の弟(おとうと)をば小君(こぎみ)といふ、かまへて何とぞ
たばかりて引合(ひきあひ)せよとの給へば、かしこまりてまかる
まと頼まれし紀(き)伊守も国にくだりて女ばかりなる折をよき
ひまと思ひ、ある夕暮に忍び車にて源氏を誘ひ参り、小君も
我が家へ空蝉(うつせみ)が許へ行(ゆき)、源氏をば其の車に置き参らせ、小君
ばかり内へ入りてみれば、姉(あね)のかたは西の方(かた)といふ
継娘(まゝむすめ)(軒端の荻といふ)と碁(ご)を打ちて居るを、源氏車よりおりて格子(かうし)の

すきまよりのぞき給へば、空蝉(うつせみ)が顔(かほ)はさのみよからず、手つきも
やせ/\としていたくひきかくしければ、いひしらずまさりて悪(あ)しからず
よわき顔(かほ)もにほひもなくて目留(とま)る所なし、さて
継娘は顔かたち継母(空蝉)よりはまさりてこそ見えし、あく碁打(うち)
はてゝ親子(おやこ)一所に臥しぬ、小君姉(あね)だちして源氏を引入参らす、娘は若く
何心(なにごゝろ)もなければよく寐(ね)入りぬ、空蝉はさしも思ひ乱(みだ)れて寐(ね)
覚(ざめ)がちなれば、衣(きぬ)の音付て、そと起き出、かくれぬ、源氏も心もしらで
ふし居るをおぼし寄るに、何しぬ人なり、娘は思ひかけねど
あされ給ふべくもなく、人違へとおもほさまなれど、却(かへつ)てあはしけれど、唯(たゞ)
はかなさしけやうにかくらひ給ひて、蝉のもぬけたるやうに

空蝉のぬぎすべしたる薄衣を取て帰り給ひて手習し
よみて侍りける哥　源
空蝉の身をかへてける木のもとに猶人がらのなつかしき哉
御かへしうつせみ
うつせみの羽におく露のこがくれてしのびしのびにぬるゝ袖かな
と伊勢が家の集にある歌を書てあらたしくよみ出る
よりは似つかはしき古歌を思ひ出すを上手のわざとする也

夕かほ

桐壺の帝の御弟春宮にてかくれさせ給ひし前坊
そひ奉る御息所ひめ宮をもうけ給ひて、やがて
みまかり六条に住給へり。故に源のかよひ給ふを六条の
御忍びありきのころなりしと巻に書り。源の御めのとの
大弐の乳母といふ。此乳母の子を惟光といふ。源の御とも
にて、此乳母わづらひて尼に成しを六条への
御みちに源とぶらひに五条なる家へ給ひ、御車入る門をあくるほど
大路に車立させて見給へば、あるじが家の隣に檜垣など新
しく渡したるに、白き花さきこぼれ面白きほどに
まつはすきかげども、すだれよりおほく見ゆ。あたりのそれの
散るを御覧じて、随身をめして何の花ぞ一ふさ

わらく来まてとおもへば、夕がほと申花なりとおしへく。おりふ
ゆしに、簾の内より童白き扇子をもち出て、これにのせて
奉れと侍へりて随身にとらせ、花をのせて帰る。源氏
見給ひて、扇をひらきて還り給ふとて立出給ふところへ
惟光扇に夕がほをのせてまいる。人うちながめつゝ
こがれたる扇をみれば、あやしと見るに、ふかく焚のかほりに物と書
すさびに見ゆれば、惟光にしそく（脂燭）召よせて御覧ずれば
わかやかなる女の手にて
心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕がほの花
と書たり。思ひの外に珍しくおかしくて源

よりてこそそれかとも見め黄昏にほのぼの見つる花の夕顔
と書て侍つかはし給ひて、それより六条へおはします。帰りのうち
惟光にとはせ給へば、此家は誰人ぞと尋給へば、例の侍を
よびて、此比家に侍れど、病人ありしかば隙なくて
外なるものゝすむとも承り侍らずと申す。そのものゝかへりん
兄弟などの女房ぞやどりて侍るが、おのこふと云。揚名の介の
家に侍る。おとこは国にくだりて、女ばかり留侍るとか申。此揚名
の介といふ事、源氏三部の中にて三ヶの大事の一ツ也。
揚名の介とは、国の名をとりて守護の名ばかりかうぶりたる役
いふ事、たとへば揚寮の守護を讃岐の守といふがごとし。此

扇に歌書し女は。帚木の巻に頭の中将の語りし
失しと語り給ひし女君の。とこなつの女なり。女をば夕がほといふ
源氏を頭の中将かと思ひ。歌をおくりてみるなど書て
おこせし也。其後惟光に才覚させて通ひ給ふ。女の方へは
しのび給へば。源氏とも名のり給はず。女も深く隠しめぐ
誰とも知らせ給はず。唯御志しのみ深くなりゆき
再々かよひ給ふ。八月十五夜にも此家にとまり給ふ。隈なき
月影。板屋の隙よりもりて見え。馴れぬ御住居
なれば、ことにめづらし。御枕のもとにて。暁近くと明神にも
叫しき(雅)声も聞ゆ。暁方に車よせ給ひ出

給ひて夕がほと共に右近といふ女ともに。なにがし
源氏の行ひのまことしく。某の院は近きに。河原の院へ
おはして留り給ふ。日高く明させ給ひて入給ふ。人も
なくて心易し。十六日一日は。おもしろく閑にてひとへにし
給へり。其夜源氏の御夢に。いとをかしげなる女きて。おのが
いとめでたしと見奉るをば。尋ねも思さで。此人をば時めかし給ふ
ことこそ。めざましけれとて。御かたはらに臥したる女を
かき起さんとするとみるほどに。おびえ給ひて驚き給へば
灯も消ぬ。夕顔は見えず。女は御息所の怨霊也。右近を
起し。火を燃せとのたまへど。おびえてうごかず。屏風の

後ろにかしこがりげに起しくに狐の足音聞えてすさまじ。人目すこえて御まへを守る紀なくば山寺このこゝろくゝまい
なるものもなし太刀をぬきて枕がみに置源氏出給ひて
惟光をと起し火ともさせて見給へば若なる
見えし女の面影かと見えてうせぬ夕顔を引うごかし
給へど物よくこうして既にもはや息も絶えて空しく成ぬ。
すべきかたなければ惟光夕顔の死骸をうち莚に
おし包車に乗せ我近づきの尼東山にありけるの元
へ行て行。源氏も御馬にて明ぬならぬと急ぎて二条院
へ帰り給ふ若生かへるかと十七日一日の夜すがら待給ふ十八日の

日夕顔の葬禮しけり。源氏は瘧氣といはれしより影なき娘
給へり。右近を召てつかひ給ふ。いふ成人まですなはちそと
君孫なりし三位の中将の御娘にて御親達はなかりし
成給ひてかすかなりしを頭中将浅からず
おぼしけるに北の方恐ろしき事を給ひて人ばかりに隠れて少くおそ
ろしげなる事をいひおこせしに恐れ給ひて西の京なる
乳母のかたにかくれておはせしを我らも住侘給ひて
山里に移らんとせしを給ひに先のとおり家は方格
嫌ひしがりしを方なりし方なりしへのあたりに惟光が母の隣
の家に住給ひしと語る。爰は帚木の巻の雨夜がたりの

かゝるに中将の給ひし人こそと。いとゞあはれに思して。
ねさなき人とて紀伊守が弟に小君といふありける姉君
ひそかに何事とかゝる。此度なりけるに空蝉をも忍び給ひて
数にならぬ。伊予の介も又伊予よりのぼりぬ。空蝉の巻は
人まちえして。又一夜ひ逢かひし。西の時かたといふ伊予
の介が娘に。少将といふ殿上人を聟に入りけるを源
氏し召ず少将があやしと思せん。三の内を女のために曹司
に報ぜして。我なりとも知らせんとある。西の時かたへ給ふ
伝へてしける

ほのかにも軒ばの荻をむすばずは露のかごとを何にかけまし

此歌によりて此女を軒ばの荻といふ。源引籠りて物さん
されど又こなたの事は忘れ給はで。折ふしは覚束なくて空蝉
よりも待わびぬに歌などよみておくらせ。九月つごもり
に伊予の介国へ下る。時あびて空蝉をも引ぐして行。源は
夕顔の事わかれにそへ空蝉さへ立去るをわびしく思して
はなむけに櫛扇などを給はりし也。彼空蝉の巻
にぬぎ置たるきぬを返して猶是給ひしをぬけの小袿をも今
かへし給ふとて源

あふまでのかたみばかりとみしほどにひたすら袖のくちにける哉

空蝉もよみて返しまゐらせし歌

若むらさき

源氏わらはやみ(瘧)を煩ひ給ひてさま〴〵療治(れうぢ)させ給へど。おちず
北山に尊(たふと)き聖(ひじり)侍るよし。呪咀(まじなひ)させ給へと或人(わく)申
しければ。忍びて北山寺に老(おい)かゞまりて。室(むろ)の外へも出ず
居ける聖を尋ね給ひ。さらば北山へおはしませんとて。供の人もなく
四五人召具し給ひ。あの聖を尋ね給ひて聖に對面(たいめ)ありて
御祈させ給ひ。御病おちさせ給ふまじなひ(呪咀)とて。くさ〴〵の験(しるし)
あらたなり。明石(あかし)の入道の娘かしづく事を語りきかせし
立出て見給へば。小柴垣(こしばがき)なと面白くしてたゝずみ給ふ

家(やど)は此ひじりの弟子(でし)の僧都(そうづ)の所なり。わらはべなどと
出入(いでいり)あそぶ女も見えければ。などゝりくゃせ給ふ。夕暮のほどに
惟光ばかり御供して柴垣よりのぞき給へば。よそ目(め)の屋に
尼。脇息(けうそく)の上に経(きやう)を置て。物やましげに読(よみ)居たる
女二人ばかり。扨わらはべぞ出入遊(あそ)ぶ。其中に十ばかりの程なるや
あるん。いとうつくしく見えけり。あの髪(かみ)もゆら〳〵とあふぎ(扇)を
ひろげたるやうにして。顔(かほ)を赤(あか)くすりなして立て居たり
尼君とみえたる人。何事ぞ腹立(はらだち)給ふぞと問(と)へば。いぬきと
いふ童女(わらは)の雀(すゞめ)の子を逃(にが)したるとなん。此子は新しき
思ひ通ひぬ藤壺(ふぢつぼ女御)によく似給へり。誰(たれ)ならんと聞(きゝ)まほしくて

元夜念じ里の弟子の僧都源信と云坊へ申入此物語など
志るしはべるに、むかし紫式部に誰人ぞと僧都に尋ね給へハ
京に侍る尼也私の妹按察大納言の後家に侍し娘二人
ありけるに式部卿の宮へまひらせ娘などをしも侍
りしが、いとけなく姪とみなし給ふ孫など育てはべる
跡をとめたるほどに、心地を悩まし藏て祈りのあまたにたのみ
侍ると語るに、さては紫の上也、清少父式部卿の宮と蕃者ハ
兄弟也。蕃つれのあまたに紫の上又姪也と来るらさまぞ
まうさも理り知りつゝ、ふとそてもしひ歩く心のまゝにもおもひ
あそんと都にして尼君にも対面などし給ふて、あつらへ給へど
いかゞとたゞひ合点し給はず女の事と紫と読りよむ
又物のゆかりと紫のゆかりといふ事古今の歌に
紫のひともとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る
とよめる此人蕃清か(?)のゆかり知りてたゞ人かくこそ源
手に摘みていつしかも見ん紫の根にかよひける野辺の若草
とよみなしよりて紫の上といふ名は蕃者せしなれバこゝに語
りて清少く出なふへのやうしの物にと書ふ嫁ける王命婦とよ
女なとせしむなへもいふかなかりしん通付給ひし此巻の初めて
みえ来みそく逢なへが始なれど、まやすみんとのやうして心を
悩くみて書けば清少(?)心地と懐妊の清心地なりしも紫のよれ

祖母(そが)もなやましさ重(おも)く成(なり)て終(つひ)に失(うせ)給へりむらさきの上
みなし子となりけるを後見(うしろみ)もなくて京の家に侘(わび)て居給ふを御父
兵部卿の宮呼(よび)とらんとの給ふを聞給ひて源氏父宮へ呼(よび)
給はぬ先にといふむかしかへしに行てぬすみ出んとおぼ
して明日(あす)父宮へ迎へ給ふといふ其夜の暁(あかつき)源おはして
車にかき乗せて帰り給ふに紫の上とゞめし少納言といふ乳母に
とりすがりてぞ泣入給へば少納言もあきれまどひながら継(とも)
おくり行く源の御家二条院へ伴ひ参りて西の対(たい)に
住(すま)せ給ひ娘のやうにいつくしみかしづき給へり手本書(かき)
習(なら)はせ数(とし)へ給ふ源

ねはみねど哀(あはれ)とぞ思ふむさし野の露わけわぶる草のゆかりを
と書給ひしを君もかき給へとありければ書(かき)もならはずと
恥(はぢ)給ふを兎角の給へばむらさきの上
かこつべきゆへをしらねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん
と書給ふ

此巻にしるして
みなしゝ記事多し

末摘花

源のみかどあひ葵(あふひ)の上を御心をかうらうも気(け)高く少々

其ぞ恐しげになりて侍るがさるは六条の御息所是
なりされバけにたぐひなくかかりのよろしげ侍る見る事然公
の内にありて様々にしく此の事にても恨み深さ公だえ也
二かしこきをもに打とけがたさにて死しぬるまで源公やすくも
思はれねに又夕顔の文婦のさまを公となえもなく物和らか成り行かぬ
公暴かりてかくらもよく思しやるにあらぬ方どうりてあく
死く別れるひしかどわすれがたくて又夕顔のやうなる
人もやと人の咄しをも御耳とめて聞おはす源の今公
とりの御乳母のさき左衛門の乳母と云ふ一生娘に命婦と
いひて内に宮仕して居る女故常陸の宮の娘君にが

故ましく侍りし常陸の宮の末におはしまして侍りし持つ所の琴んの
ある事を語り世おはすとかかる家の姫君ゆかしくおぼして琴を弾くと
聞こゆるバおくゆかしく思しけり頃しく此命婦に媒せよと
せめさせ給ふ時くさま見給へどおぼしけて見え給ふ弾きを
御前にだ侍らで忍びやかに給はせどまで居まての事
侍りてよりさればお侍り給ふ事とかかりけれどもおく/\し歌も
よみおよび侍るとて扨思し召さ侍る方とどの御縁と申
ことの方ありてよくよみ侍るすれ侍る公とありて扨々侍公
と御くし縁に思ひよりてみるかなよりて侍りからよかりし姫に
かさまとみゆるハ鼻也さ此姫の外長く赤くて普賢菩薩

のり物のごとし普賢の象にのり何にかゝる人に
逢ひ見つらんと悔しさ数々なれど浅ましかりしと我なく
でゝ誰にか見せんのぞみなかなく御目見えし紫の住居も何となれに
残しけるは綺綾なども多く清うかされたりしが今は人
念比にもてなしける源逢ひかくゝ思ひのほかなるに清
かはらぬ紫は悔しきを手習に書給ふける
なりかはしさまでも紫は何にもて末摘花を袖に埋しめん
すへはむ花さへ蕪にのせきにの事紫の哥歌より此姫君を
末つむ花といふ或時源氏の末摘より梅のかひて紫のもと
雛あそびに遊ばしきとて源氏の淨衆の内にさはり

紅粉ほどあかく付くみを給へば紫のらへいとしくて笑ひ
給ひて源清らんとあやまちの寄て拭ひ給へば平中がやうに
粉そふへなふ赤かりんはよしと言そぞかまでて笑ひ給ふ此
平中といふ人女ぞかりにはそれとなく泣体をしてみするとて
硯の水を目に塗りてありけるを女ぞかれて其水
への中へ墨を摺入ておきしが平中しらず夢にもしらで
目に付けれ数かり墨に成る其時女平中しらず鏡
を見せて
我にこそはかくしたまひけれどふとて人にすまゝつく数のかきよ
とよみしむらさきのよくて其女とそらく知りて

なく拭ひ給ひしとなり

もみぢの賀

源の御父桐壺の帝年よりて世をのがれて朱雀院といふ
にみゆき十月紅葉の頃より御賀あるべしとて皇子たち
公卿伶人の舞をならひ給へるさま〴〵宮中より心つくし
ことに御賀とて年ごろ稀なる事どもありて楽人めして
舞などの世の御あそび何る也一日試楽を内裏にて御
覧ぜられ舞人の中にハ源氏ハ紅葉をかざして
青海波を舞ひ給ふにその夕日のさしかゝりしのこゑみち
あやしかりしか左大将菊ををりてさしかへ給ふに相手なる頭の
中将立ならびてハ花のかたはらの深山木のやうに見え
しとかや其夜舞の御禄衣美に源を宰相の中将にな
させ給ふ源氏舞しを御覧じ給ひていとゞおぼしやりて
藤つぼへまゐらせて給ふのはさみに

物思ふに立舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや

御かへし　藤つぼ

から人の袖ふることハ遠けれどたちゐにつけて哀とぞみし

から人の袖とハ楊貴妃の舞の事なり年かへりて三月にぞ
藤つぼ若君を産み給ふ実ハ源の御子なれど帝ハ

露をちらせ給ひて御手をとらせ給ふに一しほ珍しくて
御寵愛かぎりなし源の御かたにすくしまたがひ給ひ
ねむ御母藤壺にハ人やあやしと思さんとくるしかりし
給ひしと見ゆ又此巻に源内侍といふ者ハ年六十
七八の宮仕の人なりしが年をいけれどもすきものゝふかくいろ
かなる人なりし源もたはふれて或時たはふれ給ふをさしの
中将見給ひて人の事をもどき給ふ源のかゝる情をもさとり
源内侍が所の中将は何かとおもふも聞も入ずして源に会
ふくもなくしおどして見顕さんと相かまへしてゐ入る
屏風のうしろへ忍び入るけしきにて中将おどかし給へハ内侍ハ

常にかひかゝるをかけて修理のたまへるに人ありと源ハそれかと
思ひてそと起て屏風の後にかくれ入る中将ハはらたち給へる
さまに太刀をぬけハ内侍もまた手を摺て拝むほどそ
すさまじかりけるに中将ハ源をしらぬかほにて笑ひて
源も中将のしわざかと知りてかくれたるぞとて立給へハ屏風のうし
ろより出て太刀持し手をおさへて太刀をとり笑ひてたはむ
れあひし足より中将もすれど此事はかくれて源をもせりし
給ひし也桐壺の帝退きさりにて御くらゐを春宮に讓り
わりさせ給はんと思しと春宮とはまりつかの巻の一の宮を
ゆるし弘徽殿の御子なり此春宮帝になりせ

給ひし御跡継の春宮には藤壺の御はらの若宮を居んと
思召ども弘徽殿は御父右大臣にて一の人重くおはしませばよせおもく
藤壺は先帝の姫宮にてもとより御位もたかけれど
御うしろ見なきを心ぐるしく思召て御門おりゐさせ給はんとて中宮に
ならせ給ふ中宮居ならせ給へば知行多し弘徽殿おだやかならず
されども我身の給はるべきに給はらずして藤壺にまさらせ給ふとて
給ふゆへ弘徽殿はいとゞ藤壺をにくみ給へり

花の宴

二月廿日余り南殿の桜咲き給ひし花見の御遊びあり
題をたまはりて親王達公卿詩を作り奉り給へり去年の十月
紅葉の御賀の時源氏の青海波舞給ひしおもしろさを
春宮思ひ出させ給ひてかざしを給はりてせちに責め給へば源氏も舞給ふ頭の
中将柳花苑といふ舞をいとおもしろく舞ければ帝
御衣をぬぎて賜ふ夜更源氏いねがてに酔てさまよひもやありくと
藤壺のあたりをうかがひ給へど常にかたらふ命婦の戸も
さしければ力なくて立出給ふとて弘徽殿の細殿と
いふ所を通り給ふに若き女の声して朧月夜に似るものぞ
なしと口ずさみて端の方へ出る源氏とらへて嬉しと
袖をとらへて引すゑ給へば女驚きて誰ぞといふ我なりと

の給ふこゑを源氏きゝしりて心をとゞめ給ふ源女に誰人ぞ名のり給へ今ハかくて絶(たへ)むとハ思はずと志ありて哥詠みたまへる

うき身よにやがて消えなば尋(たづ)ねても草の原をばとはじとや思ふ

此女のこゝろハ源氏にたゞしく深くおはしけれども嫁(とつぎ)てもまつ詠みかゝれば名のらんとおもへどもたゞず給はず此女の心あり

御かへし　源

いづれぞと露のやどりをわかむまに小笹(さゝ)が原に風もこそ吹け

とよみて暁(あかつき)近ふなれば形見に扇を取かはして別れ給ふ此女君ハ春宮の御母弘徽殿の女御の御妹

六の君といふ是を春宮の女御に参らせんとさだめたるに此花の宴を見ん為にさとより来り姉の弘徽殿へおはせしなり源ハおぼろ月よに似る物ぞなきと口ずさみ給ひしハ此ハ躬恒(みつね)が歌に照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなしとよみし歌を口ずさひ給ひし也後に春宮に参り給ひて内侍に成給へハ朧月夜の尚侍(ないしのかみ)といふかくて源ハ此女の行(ゆく)へおぼつかなくて惟光良清(よしきよ)に仰(おほせ)ふ御家人をも内裏の北の陣(ぢん)につけておき給ふ弘徽殿よりさとへ出る車何かはいづくへ帰るぞ慥(たしか)に見よとの給ふ帰りけるものかと添(そへ)て人をつけてみせしむ弘徽殿

よるの車右大臣へ参りしといへるを源へきゝ給ふ中将ハ弘徽殿の御妹なる由し御母よりはかれは更衣などあまた給ひしゆへりにくく源なども弘徽殿方にはうとくも思ひ給ねに逢事難れなまじいなど安からじと思しみだるゝにつぞ文もかよひまんとわかにかゝる三月すへに右大臣の庭の藤の花宴有しは弘徽殿も姫君達のまゐりてて花見にさそへ出るに源なども呼たまへば参りたりかの朧月夜も姫君達の御傍にそ拾ひつめかゝみてあらんと思してしばし川のこゑもとふにあふぎとらるまてかしさえんを見るとて催馬楽に諷ひかへは物をいふて御簾の内に手かけしつ紀あの出家へさしよりて源

梓弓いるさの山にまどふかなほのみし月の影や見ゆると

とよみ給へハみすのうちより

心いるかたならましかば弓張の月なき空にまよはましやハ

といふ声ハそれなりけりと思ひき此催馬楽といふ事ハ神代のうたひそのまゝ今の世の諷ひはやりに其頃人もうたひしなりまゝ今日も何事も今の世はうたひゐるなり

あふひ

桐壺かれは帝御位を春宮に譲り給ひ御即位の儀式は

巻にはみえぬ程ど世の中かはりてよろづ物うくことなりに
書おかしたまへだこれより春宮と帝と申たまう桐壺のみこと
とれ此巻よりは院と申おはり春宮には後涼殿にうつり給ひ
若宮をとすゑさせ給ひて御うしろみに源をなさせ給ふ
源此巻には大将なり。みかどの御母弘徽殿后にならせ給ふ
御代かはりのさに伊勢の斎宮おりさせ給ひて又新しくさ
だまりなんしがれ此御代には前坊の御娘六条の
御息所の御むすめ姫君を斎宮にさだめ給ふ賀茂の斎院も
おりゐ給ふ弘徽殿の御むすめ女三の宮を斎院にさだめ給ふ
源の御はらから也伊勢の斎宮は代かはりくだり給ふ

賀茂のいつきは御身にいとこのむる時かはる四月に賀茂の祭あり
其時斎院に立せ給ふに源も勅使にて御供なりそれ
ゆゑ今年は祭の儀式見どころ多くより見物なれば
都の貴賤をいはずあらゆる隣の国よりも女子を引つれ
群集す源の見んとてはいかやうなる物の車も轍く
ところなかりしに只ならぬ御身にてなやましく思へば
思ひとどまり給ひど女房達見たがりにすゝめ奉る
御母君も大宮とて大宮やもの御ちなんどもおなじく
かくれ見物しなんと忍びやかにて縹のたゝみ入まで
日たけてく御車ひきいだしでもおそけれど源のおはすかたなれば

人々のさそて通し奉る物見車多き中にあじろのすこし古び
たる二つ両の轅へおしやらんとすれどこれは並ての御車に
はあらずと情強くて動かず先年まで六条の御息所の車也
物おもはしき紀なくさめんに立出なへの葵祭とてこそ御息所
とも忍ばせ給ふ様御供の侍などは能志りおまでと源と密通
あるかくさふに忍ばせ自ら立てなし奉る物あしにおそ恥を
はらんと思ひて是非をいはせず後の方へ押やり車の
なかえも志ぢといひて車をのする物もおしひしされば
恥がましさ見えるもさ給ふにもつやし物もみえず何か
立出でくやしけれども見るらむとくやしく人めもつつかしく
憂しき事と思ひ集めなして御息所
かざしのみ見えし川のさやけき流れ見給ふさへほどそつらき
とひとり言おとし給へり新院の力もせめて日とお賀茂御禊
の日といふ其翌日を祭りといふなりみその紀の日源は斎院の
御供し給へり祭りには二条院へ帰りて紫の上をひとつ
車にて見物に出んとし給ふ紫の上此巻には十四歳なりの
稚き内は姫の今髪そぎて物まうすむすめのとつくりては鬢を
出し髪をとりあげる今日より紀日なりとて紫の上の
髪を源そそきて髪を出し給ひてよみ給へる源
はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひ行末は我のみぞみん

御かへし。むらさきのうへ
よひくだり、其のまゝ定なき満干る汐のなごりけふなれや
さく車にあひのまつてまつりに出あひしにかく宮こにはまで
ある女車より扇をさして源の御供の人を招きよせ
こゝよりほかにところなし、源の御車を立させ給へと
いひおこせし車のそばに源の御車を立させければ歌書たる
扇を奉るを御らんずれば
はかなしや人のかざせるあふひゆへ神のゆるしのけふを待ける
と書しを御覧ずれば、かのもみぢの賀の巻に逢ひ給ひし
源内侍が手なり。娘のかへし。わりなくわらひて源

かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人になべてあふひを
とよみてかへし給へば、御息所は御車の所あらそひに後れ。
はじめ物思ひつきて、後はそれより心ほれしに思ひ沈みたまふ
怨霊にて葵のうへは御なやみ物怪におもやみ給ふ。御祈さま
さまあり。護摩をたき給へども、六条の御息所の小袖に
留る御息所もあやしとは思へど、かく出ではもの思はず我ながら
うとましう、人のいはんことも恐しう思ひ、八月にも成ぬ
産の御なやみ紀待て葵のうへの御もののけ、外の外なれど
加持の僧ども、力を合て祈るにあふひのうへ少しゆるびて
成なひて源を近く呼よりて実に物思ふ人の魂は、あく

かゝるを時にあるまじけれど愁を泣なひて
なげきわび空に乱るゝわが魂をむすびとゞめよしたがひのつま
とよみ給ふ。かくきこゆるは御気色やすからぬなれば源氏も怪し
と思すかすがかくてのちはかゞきこえつれば、ほどなく若君
生れ給へり。後産もとゞこほりなくたまへど、願など立給へず、さまひ
かくありぬ嬉しさかぎりの御親、源氏をはじめ御歓び限り
なく殊に若君なれば御うぶやの儀式もいかめしく、めで
たく御祈りの僧達も汗押し拭ひて今はさりともと
心安く思ふ。御息所は平産を聞給ひて心ようからず思ひ
ぬらんとおぼしまどはれ給へど、秋の

除目行はるべき時なれば源氏も御父左大臣も内裏へ参り給ふ
御留守はかずかずに縁ふかき御胸をせき上て、くるしめり給へど
内裏へはしらせさせ給ふ間に絶入給ひぬ。源左大臣殿
御足を空にて帰り給ふ、縁の事なれば山の座主も得
呼なれず御祈りのわざにてはしん、さりともいき出給ふ
事もやと、さまざまのわざもせさせ給へど、やうやう御から形もかはり
行ば、誰々も、いふかひなしと思ひしまゝに、院を始奉り、内、春宮からも
かしこよりの御使あまたまゐりて、ふさに付ても御歎ふかく
いとゞ悲しと頼ひなく泣きにけるをあまたあく亡き骸
鳥辺野に出し奉る。左大臣殿も源氏も、おくりに出給へり

はかなき御かたみとたに暁方（あかつき）は給へ涙もかはらぬ
ことを思ほせられば、かく迄されにこそいかゞひの上の色もこきを
き給ひても法花（さう）経が色めきことと思ふも悲しう哀
にて涙
限（かぎ）りあれば薄墨衣（うすゞみごろも）浅けれど涙（なみだ）ぞ袖を淵（ふち）となしける
とて念誦（ねんず）して経（きやう）文のおやかによみ法界三昧（ほうかいざんまい）普賢大士と
のたまふ。行（おこな）ひ馴（なれ）たる法師よりもけなり。二条院へ御かへり
給はず引籠（こも）り居給へは御佗（わび）しきをいとゞあはれにて葵のうへの
御兄の頭の中将来りて物がたりなどして、なぐさめ給へり
四十九日も過ぬ迄は今も籠り居給へども左大臣の方に住

給へきならねば源氏は内院（うちゐん）などへ参り、それより二条院へ帰り
給はんとせさせ給へば左大臣殿も涙をとゞめ給はず口をしさに
又悲しさ限りなくて御袖も引くらふばかりなり
母宮はさらに悲しう時雨（しぐれ）がちにてなほ空のけしき
さへあはれにて出給ひ院へ参り給へば久しく精進（しやうじん）
ゆゑ涙や痩せ給ふとて御心ぐるしう御覧じて御まへにて物まゐ
らせ給ふ。さて二条院へわたり給へば几帳（きちやう）など冬の衣（ころも）
にしてあらためて男女つどひて待（まち）給ふ紫の上をえ
ならず見給はずかひなくうれしう
奉らせ給ふ内親御叔母（そば）の后の中宮に申給ひ

思ひし事なれにとられけるがすさまじく内思ひけるえびん
なきさは本意が。唯二条院にのこされし給ひて紫の上と碁
打。篇はさだめして独ひ給ふ或夜紫の上と新枕し給ひて
源。惟光をよびてその夜かやうに数もちゐてもちゐを
気しせよとのたまひて此事を惟光にもやさしきものにして
祝言のしるしと思ひより。ねのこもちゐ。かやうにはからひ
はんとおもはず。三つが一つなくはんかりと。やれがなりて
立ぬ。此三つを一つに。源氏式部の中にの三ヶの大事のひと
つなり。韻ふたぎのみちの塞のはひ也。榊の巻に書す
臘しき御祝ひあるべき此葵の上かくれなし。みぎりに

迄が。志のびて。かくれなく今まで紫の上を兵部卿の家
の姫君と。その中にもしびて御裳着のさわぎに父宮に
申し給ひて。ままごとにも。さしたることもなく
女の本装束を着給ふ事なり。此巻に式部卿の家を祭
などし給ひ。まことに見給ふとは。桐壺の帝の御弟源の
叔父なり。はじまり末の巻の式部卿と同人也。此御娘を。
あさがほの斎院といふなり。此巻に源氏廿一。葵の上は
廿六にて。かくれ給ふ迄

さかき

葵

あふひの巻に六条の御息所(みやすどころ)の御むすめ姫君、伊勢の斎宮(さいぐう)に定り給ひて、野宮におはしまし、嵯峨(さが)の野の宮にうつろひて、おはし給ひ、明る年の九月に伊勢へ下り給ふなれば、此御母御やす所は、車あらそひより、いとゞ物のみ思乱(おもひみだれ)て怨霊(おんりやう)となりて、あふひの上をもなく成給へば、源もうとく(疎)思して、かれ〴〵に成給ふ。此御息所へ源のかよひ給ふ事は、みかど(帝)も聞召(きこしめし)、世にもかくれなき事にて、御心ざしのうすく成も、人めかずたえ〴〵なれば、斎宮の稚き(いときなき)を見はなち(離)がたきにかこつけて伊勢へ下らんと思しおりて

斎宮と同じく野宮に住給ふを、源もさすがにあはれに思ひ人にも思しめして、ゆかれば九月比、夕ぐれに御出ありて、野の宮へ分入給ふに、秋の花もみなおとろへ、浅茅(あさぢ)が原もかれ〴〵に、松風すごく吹あはせて、何のまに〳〵面白折ふしなれば、御息所に対面(たいめ)し給ふ。久しく妻戸(つまど)なかにて逢(あひ)給へば、なにのさかも分くて、御まへなる榊(さかき)を少し折給ひて、かはらぬ色(いろ)をしるべにてこそ、斎垣(いがき)をもこえ侍れと仰給へば、御やす所

神垣(かみがき)はしるしの杉(すぎ)もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

御かへし　源

乙女子(をとめ)があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそをれ
夜一(よひと)よ語(かた)り給ひて暁(あかつき)に源氏帰り給ふ。斎宮は九月十六日
に桂川(かつら)にて御禊(みそぎ)し給ひて申(さる)の時に内裏(だいり)へ参り給ふが。
帝(朱雀)別(ワカレ)の櫛(くし)をさゝせ給ふ。京をたちて伊勢へおもむき給ふとおもひて
みかど御手づから櫛を斎宮の額(ひたひ)にさし給ふにあはれを催され
よりて伊勢へ下り給ふ。斎宮は御代がはりのにて帰(かへ)り給ふゆへ
此度の給ふをばいかにも也。扨(さて)京へかへりて後も思ひさし給ふなり
給ふなり。斎宮は御年十四にて成給ふ。御息所は三十。源は廿二
歳の源の御父院(桐壺)の帝、わづらはせ給ひてやまひせさせ給ひておゝ十月に
成ては重(おも)くならせ給へば帝も行幸(みゆき)ありて御位(くらゐ)をさしせ給
ふ。御身まかり春宮(冷泉)を必(かなら)ず御位につけ給へ。源は世の中の大小
の事なにごとも世の後見をよろづ仰おかしく遺言(ごゆいごん)なども多
かりし。春宮もかくと世給ふ。源にも春宮の後見(うしろみ)をと仰給ふ
事、事とかく何かとありしかども此御世おさまらせ御代を譲(ゆづ)らせ給へどもさ
ればの事聞(きこ)し召し政(まつりごと)をしづめさせ給へばこそ世の中もさだまりし
が、今よりは大后と御父右大臣の御心のままに政(とうなる)行ひ
給ひ、くもりし事ども多(おほ)からんと源氏は御方はいと思ひよ
りするを、紀公卿(くぎやう)殿上人(てん)も此とぞ心みなげけど、かひなくて
かくて崩じさせ給ふ。後は御方の中宮源の御嘆(なげ)きさながら源しれ四十
九日までは女御更衣ひとりは内に参りしけるが過ぎぬれば面々(めんめん)

の御栖にうつろひ給ふ藤壺の中宮は三條の宮へ
かへり給へり。源も二条院へ引こもり給ひ門の前にも
所せくさぶらひみし出仕の人々は馬車うすくなりて番所には
とのゐ物の袋もみえず。此とのゐ物は袋三ツは大事の
一ツ也とは。とのゐ物の袋とは夜具をする人のよるの物入てもつ
所なる袋也。此内へは今もあさき所の袋をおだんぶくろ
といふ。花の宴の巻に源の逢ひし六の君。帝へ参りたまひて。
内侍のかみになり給ふ。葵の巻に賀茂の斎院に立給ひし
大后はむすめの女三の宮。院の御服みて斎のかはりに
源の御伯父式部卿の宮は槿の姫君すなはち斎に立給ふ。此姫君

をも源絶ず。おもひかけ給ひしかど。斎院は嫌ひ給へばかくら
れしと思ひし。朧月夜は尚侍に成て内裏に侍り給へど
源にはさる御なからひのまたもしげなり。源は春宮の
御後見なれば御母藤壺宮が御中宮よろづにたのみまつり
例の御心を移まゐらせんとすれば恨を給ふまゝの御心くるしう
おぼしと思して兎角もてなし参らするにもの給はせ給ひしかひもなうちか
げき給ふ。院の帝は遂に忘させ給ひて何くれなひしとぞせられて
それ嫉み思ふにも今さらの事世に出来なが〻りし故嫌ひ給はんと
さはぐ御心まじりしまてぞてはる胸もせきあげなやこ給へば
人を警め給ひ御祈りのためにさりげにて源氏漸く見て

しのび給ふなるその折もいたく徒然なれば秋の野を見給ひ
めぐりて雲林院へ詣給へば御母桐壺の更衣の御兄の
律師の住給ふ所なる故にて才智ある法師達集りて論議
せさせて聞召すに此世の後の世もたのもしくおぼして
けれど猶此頃めぐりてもあはれなりしおぼしまさる紫の
上の事のみ思ひ出て思ひ給ひて内裏へ参り給へば帝
待まうけて何かと御物語のついでにきこえさせ給ふに桐
月夜と絶ぬ御わざもあらしなれども公かへさせんに
げなくしもおもひつるなど理りとおぼしてとがめさせ給はずそれ
より春宮へ参り給ふ道にて大后の御兄大納言の

頭の弁といふ人白虹日を貫けり太子おぢたりと口ずさむ
是は燕の太子丹が始皇を逆なる事といひて源逆心ある
やうにいひなせり源はあやしとおぼせどしらぬ顔よりそ参り
給へり後はかの中宮は源の御執の絶ぬをわづらはしうおぼして
かくては公をもうらみまさんと御髪おろし尼に髪
おろすといへどもすべて剃ことにはあらで肩にて切なり是を
さげ尼といふその源は大将なれば内裏へまゐり給ひそれど公
の内のかはりたるにも胸いたくおぼえぬ源
月のすむ雲ゐをかけてしたふとも此よの闇に猶やまよはん
と聞え給へる御かへし　中宮

おとゞのうちはつけていふべきもなくなどとかしこきなり。つぎ
此御代の大后と御父の右大臣二人して政を執行ひ給ふ源氏
方には左ましまさず桐壺の更衣が父大臣勝ち給ふしを
もつにおとさるゝ源氏が公ならぬ思ひ子御父の帝此
源氏を寵びたまふ然るに寵愛何事も此后の方へはおとし給へど
帝の存生のほどこそあれ崩御の後は我がよの世
一の宮の御代となれば何事も思ふまゝに執行ひて日本の政
ともに治る事出来ず源の御舅右大臣も寵愛の薄き上こと
御兄の一の宮へは事たで二男なれど帝は御てうあいゆゑ
源氏を御聟にあつかひ給ひ意趣を含みて后方より此源の

小舅頭の中将の大后の妹聟なれど是も源氏をめでたしとて
隔て心なく頭の中将はもとより源と中よければ更に男
ながらも御ひいき見て仕をおこたりて源へ再々行て遊ぶなし。
くらし詩を作り給ふなどして遊びは文字の韻をふさぐ
詩によりて何の字といふ事をあてして上
手とする遊びと源氏と中将の振舞げにして中将まけ
源を始め此時中将の若君ならびに頭の中将の仲とのかしこ
さ事今は強めていひし催馬楽といふ其の世
朧月夜の内侍此は応を歌ひ給ふ養生はこれみそろへ出で
御父右大臣の許にかよひかひ世のはきえかぬ恐ろし事ど

たびにかゝる事なれバやゝくもりて世を歎し源と對面し給ふ
度々すまの浦にハ冬ハ紀らし人をもおほかりし夏は事なきに給ふ
又ましてかみなりさはぐなれバみな立さはぐ人目しげくて
源姫の給ふ處さへやうやうかくて几帳の内にかくれて居給ひ
しかし朧月夜の御父右大臣見まひにおはしけるが源のすさ
がたをちらと見給ひそのしらせにて大后ハかの立腹
しかれバ居をひきのき給ひて此所を移せんと思ひめぐらし

はなちる里

此巻の書出しハ人しれぬ御心からの物思ひのしさ也

源の好色ゆへにかくれ物思ひ絶ざるがかく書り麗景殿
女御といふハ桐壺の帝の女御にて是も源の御継母なれども
かゝる女御の御妹三の君と忍びかよひ給ひて
物思ひのたえざる是も此巻にしるして此人の事の見え
ざれども昔年ある君のやさしき意を好くして書り
此三の君へ五月の時分源かよひ給ひて
たちばなの香をなつかしみ郭公花ちる里をたづねてぞとふ
とよみ給ひしによりて此女君を花散里といふ

須磨

大殿右大臣御かたより禄ハ源の御ためなれバ世の中をはゞからし
しばしハこなた紀事まなさる。しのびて御ふくむかしハ遠き国
へも流しけるハされん。唯家方より所を退かんと思ひ故
給ひて都を逃けまいらせ須磨へおもむかんとこゝろ用意ござる
しばし御暇乞ひにむらさきの御わかれ左大臣殿へおハして語る折え
しけるが大臣對面し給ひて天の下成さうき海まかりても
源の左遷の事のかなしくも思はざるなれどいとゞかくめく
思はずなる事と思召し命のうしさ葵の上の御をともね
悲しきを跡を給ひしが今まで御しゆめくりかげさ
給ひんほどくぞ短く給ひけるなどれ大人が源よりこの事

みなさきの世のむくひに侍りけれバ浅ましく髪さげも侍らで遠く
まかり侍らバさるべき定めなど何事に濁りなき身にまう
せてかくて侍らんも憚り多く侍りけれバ今ハと世を遁れんと思ひ
立侍るなれど、むかし今の御物語どもせさせ給ひて弟の
中将もまゐりあひ給ひて大酒など侍りて夜更ぬるまで
左大臣にとまり給ふ中納言の君といふハ故葵の上の召使
ひし女房達也。故葵の上の存生の時よりしのびて御らんじ
ければ此人ゆへにとまり給ひも大臣にと申りなへの暁に二条院へ
帰り給ひなんとするに、人ハさふらひあはれにしらしく侍へまゐる
人々の御供のさうらひにまでども旅へになじくめづる失めて

のちの世を隔てまでも捨が見るほどなるにつく引かへ、
淋しう成ぬましてあまり行も程をおかしやらるゝよる
ばかり消さく何ならぬくらし紀その世の有さまを思ひ
紫の上は限りなく歎げき給ふ源も此御別れを悲しめく
くおぼせし源の内兄帥の宮頭の中将此巻にハ三位中将
なりけるとかしこひに来り給へが対面しかんとてハ装束
給ひ鬢かで付なかとて鏡台にむかひ給へるにかゞミのかげ
おもやせ給へが我の身に襄へ給ふ何されたまふわざなりと
の給へが紫の上涙を一目にうけくみ形とせ給へが源
身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡のかげのはなれまじ　雛

と詠じ給へば紫の上
別れても影だにとまるものならば鏡を見ても慰めてまし
帥の宮中将も御対面ありて御暇の給ふさもらひ源花散里へ
暁方におはして明方にかへり給ふ今日の荷物をつけさせ
給ふ旅の御すまひはかなくて叶はぬ御道具一通りなど
文集入るゝ箱琴の一とぶり持せ給ふ知行の証文どもは
紫の上に預け給ふ今宵は御父院の御陵へ御暇乞に詣で
給ふとて宵おどろの嵐がへおもしろして春宮の御事ども
のたまひかけし給ふ暁方も何しぬはかなくほそりきへたぞ
春宮の御うしろミに故院のおひさ任せ給へがよろづに物を

おぼさるゝにや、いかなる人がかげさへなき事をはからひしに御たゝりあく 陵

来り給ふ御言伝(ことづて)をもえさせたまはぬかとおもふ人が後世に

みしかなくいかなる世をおもひすてしかひもなくぞなる

侍るべし 源

別れ道(ぢ)に出給ふものゝ侍りしをみるもあはれにさらぬ禁(のど)里

それより御陵(みさゝぎ)へ詣(まう)で給ひてさまざまの事どもをいひたる人に

ひたおもてにもの思ひ侍りける程に給ふあさ御影(かげ)さやかに

見え給ひければ

なきかげやいかゞみるらむよそへつゝながむる月も雲がくれぬる

明(あけ)ゆく程に還(かへ)り給ひて其日は紫のうへとともに御物語

まだ志るべなく夜深く立出給ふ旅(たび)の装束(しやうぞく)志たひて月出るや

程なくしらみ行くみえ給ふに道の程へ一日(ひとひ)二日(ふつか)の隔(へだて)さへいぶせかりしに

年月積(つも)らむ事よとてむせかへりつゝいざなひ給ふ紫の上に

泣志ほれて給ひしがあはれにて別れくるざるものに御形(かた)見(み)

ふりがたう美(うつ)くし 源

いける世の別れをしらで契(ちぎり)つゝ命(いのち)を人にかぎりけるかな

御かへし 紫のうへ

をしからぬ命にかへてめのまへの別れをしばしとゞめてしがな

いかゞ見すてがたけれど明はてなばとていそぎ出給ふに

乗(のり)給ふ日長きに追風(おひて)さへそひけるか、まだ申(さる)の時ばかりに

須磨(すま)にをゐては在原の行平(ゆきひら)の中納言な
らし給ひし所とよみてわびたる家の跡ありけり。
葺(うや)や芦(あし)ふく。物さびし家とも面白く見えける其跡のところの
知行(ちぎやう)の百姓(ひやくしやう)名寄(めうせ)帳に。何かのうや里めづらしき物もありやと植(うへ)させ
かれ是に見れ共ありて見かさせなくて都出て三月廿日にを
みえ寺の長老のはなし数々都の事数(ず)々おかし出て人々
上せて紫の上へ筆法が朧月夜なとへ文などの御もとへ
御返しとも見れなふる哀しきれ共あさましき紫の上より小袖
袂のこほれ衣など寄てとひし給へ里御の巻子伊賀へ下る
給ひし六条の御息所よりも御はらへふみの御使まいらす源

御役を遊く京よりせらく伊勢の事などの御有様の荒ちる斎宮
よりも御返しあり朧月夜とも思ひしく其やうし給ふ此
人もさしも引籠(こも)りて居なから御ゆるしあらすして七月に
内裏へまいり給ふ帝殊に志厚(めづ)志て御まへり給ひける。
さるとせなに源の居なかの御遊びとも業(つえ)なくて継々(つぎつぎ)の
御てんは唱志のらん故院(こゐん)の御遺言(ゆいごん)を守らへなくなし
給ふもつゝみてもしんとて深くかのせなへが朧月夜なとと
思ひはへとおぼす須磨のしはげしくも秋ふかきにいそぐ
思ひさあむかしは行平がとての紙を継(つぎ)でまゐるとし
唐(から)の綾(あや)などにて面白くの絵ども書すさひなとに見給ふ時

まて夷比の上に千枝常則よりうつしとゞめて甕をまうけ
ゆかれは精進にて行ひをおこたらせ給ふ心にいたり給へる郎
方にむかて釈迦牟尼仏の弟子と名のりてゆるさるゝ経
よみならひ給ひいとねんごろに念じ給ふ房の庭に祓て出くる
舟の棹のさきにまうでくるを見るとかゝづらひて波のこぼるゝを見
さうひあへるは手つまに見えし珠数のくにおそてうと見し
初房は虚しきを人のつらきやにや旅の空にとふ旅の出して
よつよとは源の内蔵人なる民部の大夫とかいふ惟光
行右近のせうとかいふは篤本の巻にある伊予の介の子息
紀伊守が弟也其比筑紫よりて大弐登る源かくて相えぐるを
驚かさし子の筑紫がと語りて舞にも似たりし此大弐の娘五節の
君といひしも源むかし京にて逢ひしが五節も歌などよみて
さのびて源へまゐらし都の公卿殿上人などより須磨へ
とふらひに文遣るもいとかく年頃なれど作らぬものかは
絡みさん人と甕をまうるを大后宮へ聞えて面白からず住居ひさ
世の中と非にかゝる故鹿を馬といひしやうに都の殿上人なども
追従をするものなかりしかば文なども絶ける明石の浦は
修と道なれば良清入道の娘へ文遣りなれど逢ひ事も
せん此入道は大臣の子なりの入道俗の時は左近の中将也しが
かく流末に劣りて男なくて浄なりとて官位を辞し

かしらおろして明石に引籠りし也唯むすめひとりよき姫なとゝ
けれ似合しき方よりくれ〳〵数多そへしかんと有しかど思ふ所
ありとて合点せず源の須磨におはしますを海よりむかへくわしぞ
源へ奉らんと女房にいへが歴々の浪々へく持ひそうらへ
みやこの御目をさへねすみ払れ世へに左遷し給ふ人の此
田舎にすむ山賤をいかで御心に入給んかはくす流人を
聟にせんもいましし紀事とて入道腹立て源の
御母桐壺の更衣は入道か伯父按察大納言の娘也云々
身なれて宮仕に出しけれは国王の御寵愛ありしか
罪にあてられて流されし人は更衣の我身にもさらへて

何事にも女は出る人に任る事也只女の心ならはくそて別し
方々が幸をまねく也神の御恵を織むとて家に二度付
住吉へ詣させけれ年をかさりぬ須磨にも去年桂たひ
若木の桜の花に咲しとそかへて花ぞ此花をおかし
出花菱の上の御兄頭の中将今は宰相也世のとがめ何のて
同じ罪に何かしも是非なしとて御とふらひに須磨へおはし
ありしよりは珍しきにも嬉しさみも先一ふに涙ぐみ御まげける
家の体から唐めきたる所の様さまにて石の橋松の柱
おろそかに面白し泉郎ともの何されなして貝ども持て来るを
御前へ召出て浦々年経る住まひも蔵経のうみの色ての

君はうれへ侘さへ給ふ折なれば衣ども小袖など給はせなどもすがら
御ぐしのまゝ詩を作り遊び給ひて朝朗(あさぼらけ)のほどに御前に
三月一日初の巳(み)は日也思ふ事ある人は此日禊(みそぎ)すれば思ふ事
叶ふと或(ある)人申せば海づらも見まほしくて出給ひて軟障(ぜぢやう)ひき
めぐらしたる舟に乗て出給ふにぜぢやうとは幕(まく)の事なり
陰陽師(おんやうじ)召てはらへし給ふ源
八百万神(やほよろづかみ)もあはれと思ふらん犯せるつみのそれとなければ
よみ給ふやうやうと思ひて長閑(のどか)成海の面を見て遊ぶに
風吹(ふき)出て大雨ふり海づらは大すまひしと見えるやうに
光(ひかり)みちて雷なりひらめく紅(こう)寸俄(やゝ)にして御の給ふ

此国(こゝは)の人氏の泉郎(あま)どもはさわぎまどふに源のとゞまりに経(とく)
吟(ぎん)じて居給へば聊(いさゝか)まどろみ給へば人のさま見えぬ物の来(き)りて
なぞ宮より召すには参らぬと云ふと夢(ゆめ)に見給ふ龍宮(りうぐう)
の見入たるにやと思(おぼ)すに此すまゐもうるさくおぼし
成ぬ

明石(あかし)

なほ雨風やまず雷(かみ)の鳴しづまらで日比(ひごろ)になればいとゞ
人悲しさも添(そへ)て来(く)しかた行末も叶はぬ心の亡ぞいる
みと思ば法のみちに思(おぼ)して入らせたし給ふにも心

浦風やいかならん思ひやる袖干ぬまもなし波高かなる処
御使さへ。なかりしを労して近く召寄て京の事ども
問給ふに京にも此雨風定めるにあらんとて御祈ども侍る
などもめでたしと海ハれ。御供の人々住吉の神をとゞめ
よろづの神々に願をたてゝ祈るにいよいよ雷鳴まさりて轟て
源氏の御座の間に續きたる廊に落ちかゝり火もえあがり廊ハ
やけぬ。上下もいとゞ心あわてゝ何さまともなく空ハかな
墨摺たるやうにて日も暮ぬ。かくし海どもしづかなる夜の夢に
御父故院源氏の御傍に来らせ給ひて。何どかく怪しき所にハ。
とくとく住吉の神の導給ふまゝに舟出して此浦をされ。

我ハ位に有りし時あやまちハなかりしかど。おのづから犯し
ありて罪を清むる程とて暇なかりし。此序に内裏に奏ん
為べき事有れバ。いそぐとて。かいひそく夢の覚ぬ暁に明石の
入道より舟とて人来迎り。此ハ物語とはかりかゞ夢の
告に待せ御迎ひを給ふ此よし源氏へ披露し給へとて小舟に
人二三人乗せて来せり御文章を此浦を去れと告給ひよ
かく夢の告とて迎ひに来まつれバとて何へぞ此舟に乗りて
明石へ来るまゝに入道源氏を見奉りて老を忘れ齢を
延る心地して先住吉の神を拝しまゐらす心の限り。
さてかゝる序も我娘の事いひ出んと待まゐらせいそ

かくて或夜(あるよ)源琴(きん)のことを弾(ひ)き給へば入道行(おこなひ)も怠(おこた)りて
御まへに来り愛居(めでゐ)して娘をば岡部(をかべ)といふ所に住家をつくり
別(べち)に住(すま)せける岡部より琴(こと)琵(び)琶(は)などよせ入道びはを弾く
人々に唱歌やうが謳(うた)はせかくてそのさんなすがら中々面白き御遊び也
源筝(さう)の琴を弾よせて是は女の弾ければかうひきつるこそ。
おもしろき物なれと仰せらる詞(ことば)につきての娘の琴びはと云ふく
よしを語り是を源へ奉りたき願(ねが)ひを住吉の神にかけをれど
給ひてかく酒盛へおもしけるとおぼえ侍るなど申す
かくて入道
独(ひとり)寝は君もしりぬやつれづれと思ひあかしのうらさびしさを

とかくせさせ給ひければ源
旅衣(たびころも)うらさびしさにあかしかね草の枕(まくら)は夢も結(むす)ばず
其のちは入道思ふ事かなひし心地して喜びのうちすぐ
さて思ふ子又の日娘のかたへ御文遣はし給ひて入道も人
知れず源やうやうと待居(まちゐ)たれば岡部へ行て見るに恥かしくて
みずしぬ書きみなれば娘は恥(はづ)ずかしくて返しの事せずと云
まびて入道ぞ返し書てまゐらすれば又の日せんじ(宣旨)がきされ
みなれぬとて又文給ふ娘は一生涯は娘はかへし書し也
せんじがきとは代作(さく)せ書(うき)の事なり是よりはおりおり文を遣
かし給ふ源は三月十三日雨風強(つよ)かりし夜夢に故院(こゐん)を

御夢に御覧じし御目と見合せなりしと御覧じて常ならず。
みかど眼病（げんびやう）とならせ給ひて。たえがたく思召せと御母后も
なやましう思す。是は源氏を流し奥（おく）ゆへならん今は召かへし
給へやとありしく御母宮に仰（おほせ）ありしけれどもせ給はで三年を
まで（など）しく召かへさせ給ふも縁きことにて后の御心にくて秋
の夜ぬ。明石には旅寝（たびね）もいとゞ物の紀行なりなされ御娘を
御伽（とぎ）にまゐらせよと入道にかたらひ給ひて源氏の君へ物語せん
とは思ひけれど。女は数（かず）ならぬ身にいかでかと思ひしなんや
年の程へて秋（?）が御事も何しが中々物思ひなき
事の思ひをかなしげなるにて心うちみんと思へば心ともなく

去てまゐりしが。玉鬘（?）にまけ給ひて八月十五夜に源氏の君への
替らせたり。かく猶思ひけるより。さ海かくうち。あり海なしきて
都の人々には芳ら猶が御なさし浅からび給くかゝる給ふ
かくて兵部宮をもかくつりね内裏（だいり）には御なやみさりやうなき給ふ
御帝のかみのひかひにて世の中を治めしが。右大臣の御娘
弘徽殿（こきでん）の女御の御子に男宮生れたまへど二つに成給へるが。
ゐまそと将春宮にたて世を譲（ゆづ）らせ給ひ摂政（せつせい）を源氏に仰付んと
おぼして后の御いさめをも聞入給はねば源氏を召還（かへ）さんに定り
七月廿日頃ほひに明石へ御使下りてゆるしの宣旨下さる
源氏は嬉しきものに思けるも又明石の御方に別れ給ん事を思へ

入道ハ此より猶情ふかくて別を惜しミし事を聞えしより
娘ハ六月ばかり懐胎ありけれバ、さるべきやうにして京へ
迎とりてかしづきけるに、源門出の前の夜ハ早く宮都へ登りて
参りて琴をかきならし給ふ。是を聞きて其処に跡を慕ひ
しのびて對面せんと。かの子琴ハ唄ありし念
文人が語りし清かりし
聾宗ニ彩さ重ねる人とことなく聞せぬ音にやうけて弾
内田重し涼
何人そ此琴をも弾る中の緒は志るべハ志るに聞かしさらん
入道源門出の折ましけ。さ海にハ弓のをはかの人にて猿の

物言東路へ志さし清ちに赴ける。情のこせり入道清盛が飾をとり
をしミ。かれ清くるまで泣執る事止かたく若き人々ハ等しく袖を
ぬらし京へ帰りて思ひつゝ二条院へ入りせしかハ都の人々も
清盛のくもりに挙けるして悦び泣きをせり。それより清盛公は
段より数の外の権大納言に陞進す

早稲田大学図書館
011888008472